グループ討論　事例
＜プロジェクトの進捗管理＞

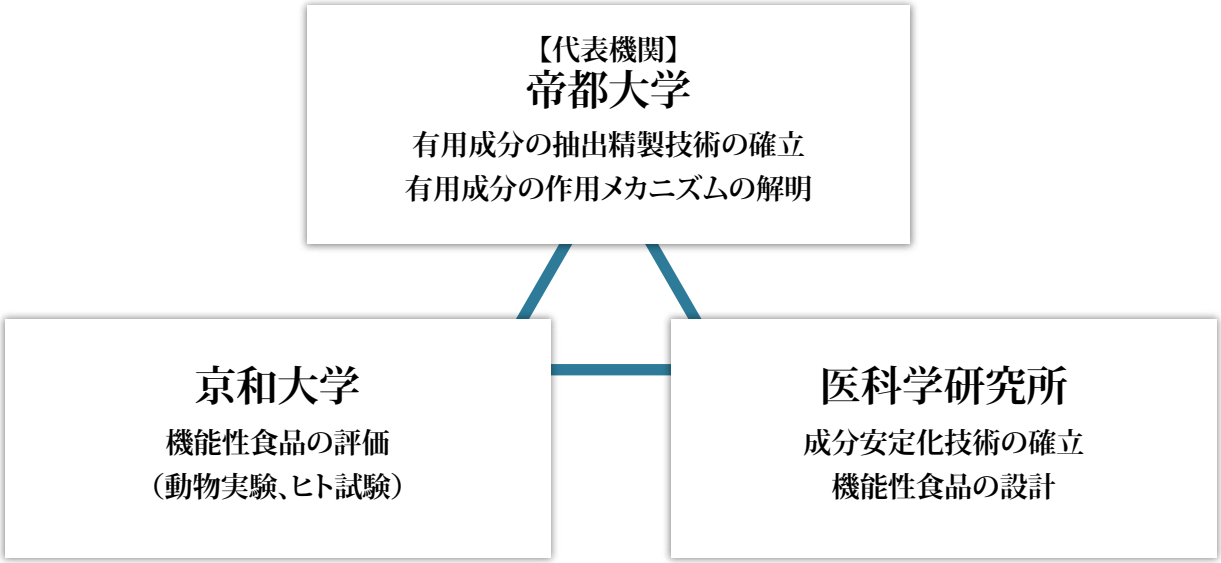
舞台　帝都大学

あなたは、中規模の国立大学法人帝都大学に所属する上級（シニア）のリサーチ・アドミニストレーター（URA）です。
帝都大学は、工学系と社会科学系、教員養成系の学部や大学院で構成されています。教員の総数は 800 人程度です。教員は全学的に実践的な教育志向が強い特色があります。
帝都大学の URA システムは数年前に導入されました。あなたは、導入と同時期に公募で採用されました。URA は全学組織である「研究推進・イノベーションセンター」に所属しています。同センターには、センター長、副センター長2人がいますが、いずれも教員の兼務です。
URA は 8 人配属されています。4 人ずつ 2 つのグループに分けられています。あなたは、産学官連携や知的財産マネジメント、ベンチャー支援を手掛けるグループ 1を率いています。URA の階層は、シニア、ミドル、ジュニアの 3 段階です。あなた以外のメンバーはミドルが 1 人、ジュニアが 2 人です。特許管理については URA とは別に企業を定年で退職した 2 人も業務にあたっています。もう一方のグループ 2 は、大学の戦略企画向けの分析や公的資金獲得支援を手掛けています。
あなたのグループのジュニア URA2 人は経験が浅いため、2 人の育成もあなたの職務になっています。また、ミドルの URA も研究者からの転職で研究支援業務の経験は浅く、3 人とも業務で迷うと何でも聞いてきます。「まずは自分で対応策を考えてから相談してください」と普段から伝えていますが、あまり突き放すと、あなたに黙って業務を進めそうなので時間の許す限りミドル URA、ジュニア URA と対話することを心がけています。

農林水産省委託事業【医食連携プロジェクト】

あなたのグループのミドル URA の百合（ゆり）根（ね）は、工学部の赤城（あかぎ）准教授の農林水産省委託事業の申請書作成支援を担当しました。ある日、百合根が赤城准教授から連絡を受け、農林水産省委託事業「医食連携プロジェクト」の研究代表者として、めでたく採択されたことがわかりました。
赤城准教授は 7 年前にテニュアトラック教員として帝都大学に採用され、5 年間の任期で優れた業績を上げ、学内でも高い評価を受けました。その結果テニュアを取得し、今では研究主宰者（Principal Investigator）として自立した研究を推進している優秀な若手研究者です。
一方で、赤城准教授は、複数の組織を横断した大きなプロジェクトの研究代表者は初めてのことで、研究チームの全体のとりまとめや省庁とのやりとりなど不安な面が多々あり、全面的に支援してほしいと百合根に依頼しました。しかし、百合根も自ら申請支援を担当した大型のプロジェクトが採択されるのは初めてのことだったので、支援の具体的なイメージを持たないまま、とにかく「当センターとして全力をあげて支援します」と元気よく返事をしてしまいました。
百合根が申請支援を担当したプロジェクトは以下のような内容でした。

＜プロジェクト基礎情報＞
①研究期間：3 年間（2 年目に中間評価あり）
②研究ステージ：基礎段階
（終了後、優れた成果を創出した課題は公募を通さずに応用段階の委託事業に移行できる仕組み）
③目指すゴール：事業化
④予算：1億円（含 30% 間接経費）×3年間
（内訳:帝都大学 5 千万円、京和大学医学部3千万円、医科学研究所（独法）2 千万円）
⑤コンソーシアム構成：
研究代表者　帝都大学理工学部赤城准教授
参画機関　京和大学医学部、医科学研究所（独法）
⑥契約関係：
「委託契約書」農林水産省・帝都大学
「コンソーシアム協定書」帝都大学・京和大学・医科学研究所
⑦研究テーマ：「沖縄固有の植物ミドリヤマブキに含まれる認知機能障害予防作用を持つ有用成分の研究」
⑧参考情報：プロジェクト採択時点の研究進捗
帝都大学：ミドリヤマブキに含まれる成分Aの抽出精



製に成功し、効率を上げるため検討中。
京和大学：帝都大学から提供された成分Aを用いて予備的な動物実験を実施し、記憶障害の改善が示唆された。
医科学研究所：帝都大学から提供された成分Ａを用いて成分安定化技術の研究を開始した。

なお、あなたのグループ1では日常的に下記のような業務を担当しています。

・産学連携（共同研究・受託研究・学術指導の契約、受入れ調整、問合せ窓口など）
・知財管理（特許調査、特許出願、その他権利化までの中間業務など、発明届出書は年間１００件程度）
・展示会出展（規模の大小はあるが、年間１０件程度）
・ベンチャー支援（相談窓口）

本日の課題
【グループで討論する項目】

＜１＞
上記プロジェクトに対する効果的な支援とは具体的に何が考えられるでしょうか？目指すゴールを見据えて、時系列で考えてみましょう。

＜２＞
研究推進組織としてサポート体制をどのように考え、指示を出すべきでしょうか？

（講師・ファシリテーター用資料）グループ討論　事例
＜プロジェクトの進捗管理＞

検討例

サポート体制：

○センター人員配置 主担当・ミドル URA、副担当・ジュニア URA 2名

○学内他部署との連携

○民間バックアップ機関の活用

○他の学内外研究者との橋渡し

支援内容：

○ミーティング開催：

研究チームミーティング 2～3カ月に1回

運営ミーティング：半年に1回（研究チームミーティングと合同で行う。省庁のプロジェクト担当者も呼ぶ。）

○進捗状況の把握・調整：

連携企業の探索、学内規程の理解（利益相反規程、輸出管理規程等の各種規程の理解、部局ごとに規程の仕組みが異なる）、連携企業候補への必要な範囲での情報開示（NDA）、機能性食品としての商品化戦略）、知財戦略（公開・未公開情報の整理、基本特許の可能性、応用特許の出願戦略）、ニーズ調査（市場調査、企業ヒアリング等）、外部への成果発表（学会発表と特許出願のタイミング）、成果報告書作成、機能性食品の表示に関する規制緩和への対応

○研究資金配分機関との調整：

特許出願に際する届出、報告書提出、予算計画変更に関する問合せ・手続き

○外部機関の活用：

知財戦略、ニーズ調査、ライセンスや臨床試験に際して民間バックアップ機関の必要性

○事業終了後の支援：

応用段階への移行審査対策、大学発ベンチャーの可能性、連携企業との共同研究開発立上げ、新たな競争的資金への申請の要否の検討

時間配分（全体 95 分）

①5分：導入の説明

② 35 分間：グループ内議論

③ 42 分間：発表（各グループ3分間、質疑応答 4 分）

④ 13 分間：まとめ（ケース分析、論点整理、議論のポイントなど）

当日のグループ討論から

＜課題1　効果的な支援を具体的に考える（ゴールを見据えて時系列で）＞

1. 会議運営・URA の役割
   - 全体の会議スケジュールを設定する。
   - 年次報告書の取りまとめを担当する。
   - 省庁窓口の対応を行う。
2. 進捗管理（プロジェクト全体）
   - 運営委員会で進捗管理を行う。
   - 研究推進協議会で全体の方向性を決める。
   - 初年度末に全体を総括するための協議会を開催する。
3. 事業化に向けて（1年目）
   - 市場調査、関係法令の調査を行う。
   - 知財管理を行う。
   - マイルストーンを決める。
   - 最終目標の確認をする。
4. 事業化に向けて（2年目以降）
   - 大学発ベンチャーの起業を検討する。
   - 企業への売り込みを行う。
   - トクホ（特定保健用食品）申請を検討する。

＜課題2　サポート体制をどのように考え、指示を出すべきか？＞

- 間接経費を活用した人材配置を考える。
- ジュニア URA 1名をエフォート 30% で付ける。専属の URA 1名、事務職員1名を雇用する。
- ミドル URA を主担当とする。コーディネーター1名、ジュニア URA 1名をサブで付ける。
- 連携する機関（京和大学、医科学研究所）ごとに担当の URA を付ける。